

一 已然形止め。

二 一般の人の目には見えなかったが、利仁の目には、降伏のために現われた護法・鬼神の類が見えたのであったらうの意。

三 「マチ」は「忽」の捨て仮名。

事ヲ語給ケルヲ聞テナム、此ノ国ノ人、「然バ、利仁ノ將軍ノ死ニシ事ハ其調伏ノ法ノ驗シニ依テ也ケリ」トハ知ケレ。此レヲ思フニ、利仁將軍モ、糸只人ニハ非ズトナ思ユル。然カ、空ニ向テ切ケムハ、定メテ目ニ見エケルニコソハ有ケメ。然レドモ、法ノ驗シ掲焉キガ故ニ、忽マチニ死ヌル也ケリトナム語リ伝ヘタルトヤ。

それを聞いてわが国の人は、「なるほど、利仁將軍が死んだのは、その調伏法の驗によるものであったのだ」とはじめて合点がいった。これを思うと、利仁將軍もまったく並々の人ではないと思われる。というのも、そのように空に向かって切りつけたのは、必ずや相手がはつきり目に見えたのである。だが、修法の靈驗があらたかであったために、即座に死んだのである、とこゝろ語り伝えていふことだ。

26字×10行=260字

今昔物語集 一

日本古典文学全集 21

昭和46年7月10日 初版第1刷発行

定価 1500 円

校注・訳者 馬淵 和夫
国 文 歴
今 東 文 達

発行者 相賀徹夫
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1

印刷所 凸版印刷株式会社
東京都台東区台東 1-5

発行所 株式会社 小学館
東京都千代田区一ツ橋 2-3-1
〔郵便番号〕 101 〔振替〕 東京 200
〔電話番号〕 東京 03-263-2111

©K. Mabuti F. Kunisaki T. Konno
1971 (著者検印は省略いたしました)
1393-613021-3068
造本には十分注意しておりますが、
万一落丁、乱丁などの不良品の場合
は、おとりかえいたします。

「絶食」と同意。二 仙人が金剛童子に化して現れたもの（大系）とすれば、いわゆる表面金剛化の如く、悪鬼・病魔退散の威力を持つ護法童子。三 驗記「持白飯・授信」。四 比叡山の西塔の一院。光孝天皇の御願。延慶の建立に於て、宇多天皇の灌頂が行なわれた。（叡岳要記）。五 正しくは「延慶」。内供奉。元慶六年（八三二）二月、任第三代宝幢院（西塔）校校。千光院建立。六 ここでは師僧の敬称。伝「今亦有主、名陽勝仙」。七 好意をこめて贈る品物。八 驗記は延喜二十三年（九三三）伝。神仙伝は延喜十八年、二十三年のいずれの事とするも陽勝を元慶三年（八七三）、十一歳（驗記・伝・神仙伝）とする記事に矛盾する。九 一切の生物。一切衆生。二 可能の意。三 生国、つまり能登国をさす。四 法華經譬喻品第三に「三界無常、猶如火宅」とあるによる語。煩惱が盛んで安らぎを得ない三界を火宅と燃える家にとえたもの。ここでは娑婆世界。現世。五 觀音の緣日に当たる。六 驗記「毎年八月末。比叡山の不断の念仏は、八月中、七日の間（三寶經によれば十一日から十七日まで、不断念仏緣起によれば八月中の七日目）修した（三寶經下の二五・石清水不断念仏緣起）ことから、驗記の記事が正しく、本話に「毎月ノ八日」とするはいわれない。「不断ノ念

仏」は、日数を定めて、昼夜の別なく、阿彌陀仏の名号を唱える行法。二 大系に伝教大師をさすとするは誤り。比叡山の不断の念仏の創始者慈覚大師円仁をさす。三 三寶經下の二五。八ここでは、慈覚の建立に於て、不斷の念仏を修した東塔の常行三昧院（堂）をさす。講堂の北にあり、般舟三昧院とも（三寶經下の二五・山門堂舎記・叡岳要記）。四 これ以下、話末までの典拠未詳。ただし、依拠文獻はあったと考えられる。一 出典解説。二 宇治拾遺・真言伝「千手院」三 正しくは「靜觀」。増命の諡号。桑内安峰の子。延慶の弟子。第十代天台座主（延喜六年十月〜同二十二年五月）。第四代宝幢院校校。延長元年（九三三）任權僧正。同三年任僧正兼法務。延長五年没。年八十五。往生人。千光院（千手院とも）座主と号した（靜觀僧正伝・僧綱補任・天台座主記）。三 仏頂尊勝陀羅尼の略、釈迦如来の仏頂より現出した至尊仏、尊勝仏頂尊の陀羅尼呪で、過去一切の罪業を消滅し、生死の煩惱を脱する功德があるとされる。一 三六六の注。二 葉書にとも。もと薫香が次第に物にしみ移ってやがて物自体の香気となることをいふ。ここでは多年の修行の功が身についたの意。二 陽勝に同じ。ただし、「勝」は「シウ」の音、「照」は「セウ」の音。「シウ」は（sion）「セウ」は（seu）の音。通ずる可能性はあった。二 三の一句、宇治

有ケリ。食絶テ日来ヲ経タリ。不食ニシテ法花經ヲ誦誦ス。其ノ時ニ、青キ衣ヲ着タル童子来テ、白キ物ヲ持テ僧ニ与ヘテ云ク、「此レヲ可食シ」ト。僧此レヲ取テ食フニ、極デ甘クシテ餓ル心直ヌ。僧童子ニ問テ云ク、「此レ、誰人ゾ」ト。童子答テ云ク、「我レハ此レ、比叡ノ山ノ千光院ノ延済和尚ノ童子ナリシガ、山ヲ去テ年来苦行ヲ修シテ仙人ト成レル也。近來ノ大師ハ陽勝仙人也。此ノ食物ハ、彼ノ仙人ノ志シ遣ス物也」ト語テ去ヌ。

其後、亦、東大寺ニ住ケル僧ニ陽勝仙人値テ語テ云ク、「我レ、此ノ山ニ住シテ五十余年ヲ経タリ。年ハ八十二余レリ。仙ノ道ヲ習ヒ得テ空ヲ飛ブ事自在也。空ニ昇リ地ニ入ルニ障無シ。法花經ノ力ニ依テ、仏ヲ見奉リ法ヲ聞奉ル事、心ニ任セタリ。世間ヲ救護シ有情ヲ利益スル事皆堪タリ」。

亦、陽勝仙人ノ祖、本国ニシテ病ニ沈テ苦ミ煩フニ、祖歎テ云ク、「我レ子多シト云ヘドモ、陽勝仙人其ノ中ニ我ガ愛子也。若シ、我が此心ヲ知ラバ、来テ我レヲ可食シ」ト。

陽勝、通力ヲ以テ此ノ事ヲ知テ、祖ノ家ノ上ニ飛ビ来テ、法花經ヲ誦ス。人出デ、屋ノ上ヲ見ルニ、音ヲ聞クト云ヘドモ形ヲバ不見ズ。仙人祖ニ申シテ云ク、「我レ、永ク火宅ヲ離レテ人間ニ来ズト云ヘドモ、孝養ノ為ニ強ニ来テ、經ヲ誦シ詞ヲ通ズ。毎月ノ十八日ニ、香ヲ焼キ花ヲ散シテ我レヲ可待シ。我レ、香ノ烟ヲ尋テ此ニ来リ下テ、經ヲ誦シ法ヲ説テ、父母ノ恩徳ヲ報ゼム」ト云テ、飛去ヌ。

亦、陽勝仙人毎月ノ八日ニ必ズ本山ニ来テ、不斷ノ念仏ヲ聴聞シ、大師ノ遺跡ヲ礼ミ奉ル也。他ノ時ハ不来ズ。而レバ、西塔ノ千光院ニ淨觀僧正ト云フ人有ケリ。常ノ勤トシテ夜ル尊勝陀羅尼ヲ終夜誦ス。年来ノ薰修入テ、聞ク人皆不貴ズト云フ事無シ。

着た童子が来て、白い物を僧に与え、「これを食べなさい」と言う。僧はそれを取って食べたが、ひどくおいしく、飢えがたちどころに去った。そこで、僧は童子に、「あなたはいったいどこで来たのか」と尋ねると、童子は、「わたしは比叡山の千光院の延済和尚の童子だったが、山を離れ、何年も苦行を重ねて仙人となった者です。このごろの師僧は陽勝仙人です。この食物はその仙人がわざわざおめくみくだされたものです」と答えて去って行った。

その後また、東大寺に住んでいた僧に陽勝が会い、「わたしはこの山に住むようになって五十余年たった。もう年は八十余歳になつてゐる。仙術を習得して、自在に空を飛ぶことができるし、空に昇ることも地にくだることも自由にできる。また、法華經の力により、仏にお会いして佛法をお聞きするのも思いのままであり、世の中を救い衆生に利益を与えるにもこと欠くことがない」と語った。

また、陽勝仙人の親が故郷で病にかかり苦しんでいたが、その親が嘆きながら、「わたしには子供は多いが、陽勝仙人はその中でも最愛の子だ。もしわたしの心がわかるなら、やってきてわたしをみるといい」と言う。陽勝は神通力によりこのことを知り、親の家の上に飛んできて法華經を誦した。あ

る人が外に出て屋根の上を見たが、声は聞こえるが姿は見えない。すると、仙人は親に、「わたしは永久にこの火宅の世を離れているので、人間界には来ることはないのですが、孝養のためにしてやってきました。経をよみ言葉を交したのです。毎月十八日に、香をたき花を散らしてわたしを待つていてください。わたしは香の煙を尋ねてここにきて、経をよみ佛法を説き、父母のご恩に報じたいと思います」と言つて飛び去って行った。

また、陽勝仙人は毎月八日に必ず比叡山に來ては不斷念仏を聴聞し、慈覺大師の遺跡を拝み申すのであった。他の日には來ない。ところで、西塔の千光院に淨觀僧正という人がおつた。日ごろのお勤めに、夜ごと尊勝陀羅尼をよまずが誦誦する。長年の修行が十分に実り、これを聞く人はだれも深く尊んでゐた。

さて、陽勝仙人が不斷念仏を聴聞しにやつてきて、空を飛びながらこの僧房の上まで來ると、僧正が声高く尊勝陀羅尼をよんでいる。それを聞いて深く喜び感じ、僧房の前の杉の木において聞くといよいよ尊く思われたので、木からおりて房の高欄の上に來てすわつてゐた。すると僧正がその様子を怪しみ、「あなたはどなたですか」と尋ねた。「陽勝でございます。空を飛んでおり